

## 報 告

# 児童養護施設と情緒障害児短期治療施設における 児童の虐待の有無と問題行動についての比較研究

The comparative study about abuse and problem behavior of child at nursing institution  
for child and short-term therapeutic institution for emotionally disturbed children

八木 修司<sup>1)</sup> 中村 有生<sup>2)</sup>  
万代ツルエ<sup>3)</sup> 塩見 守<sup>4)</sup>

**要約：**本研究は、児童養護施設と情緒障害児短期治療施設（以下、情短施設）に入所する児童の虐待の有無と児童の問題行動についてアンケート調査研究した結果を検討したものである。入所している児童の受けた虐待の状態に違いが見られ、身体的虐待や3種虐待重複など重篤な被虐待児童のケアが情短施設に求められているといえる。また、虐待なし群とネグレクトのみ群は児童養護施設に多く、ネグレクト児童の基本的な養育とケアは児童養護施設の重要な役割といえる。虐待種別では、外化された問題行動は情短施設に有意に高い項目が多い。しかし、内化された問題行動は児童養護施設と情短施設に有意差がない、或いは児童養護施設が有意に高い項目もあった。これらのことからそれぞれの施設において、求められる役割に違いが明確になったと言える。

**Key Words：**虐待種別、問題行動、児童養護施設、情短施設

## I はじめに

平成12年に「児童虐待の防止等に関する法律」が施行され、虐待件数の入所の増加に伴い、児童養護施設や情短施設などの児童福祉施設における被虐待児童の入所が急増している。厚生労働省の平成21年の報告では、被虐待児童のそれぞれの施設の入所児童のうち、児童養護施設では59.2%、情短施設では77%が被虐待児童であった。それぞれの施設の役割は児童福祉法上では分類されており、児童養護施設は養護の必要の保護、養育であり、情短施設は治療的介入が必要な児童への専門的な支援である。しかし、児童虐待の増加にともない、本来は情短施設に措置されるべき児童が児童養護施設に入所する傾向が増えてきているという背景がある。結果的に

に、児童福祉施設における問題行動や施設内暴力の問題が増えており、児童養護施設においても情短施設に匹敵すると言われている。これらの実態について、児童養護施設と情短施設に関しての比較を行なった研究はあまりなく、現状が明らかにはなっておらず、それぞれの施設における支援が十分に把握できていない状況である。

本研究では、それぞれの施設で起こっている児童の問題行動に焦点をあてた調査を行い、今後、被虐待児童にどのような支援が必要であるかの検討を行なう。

## II 調査概要

### 1 アンケート調査の趣旨

八木ら（2008）の研究をもとに、今回兵庫県内の児童養護施設を対象に虐待種別と問題行動についての調査を行い、児童養護施設と情短施設に入所している児童の問題行動の特徴を虐待の有無、虐待の種別ごとに比較検討し、両施設のそれぞれの特色を考察することにより、児童養護施設、情短施設における課題の特徴について調べ、それぞれの施設種別に応じた支援について検討を行う。

2010年12月2日受付／2011年1月19日受理

1) Shuji YAGI

関西福祉大学 社会福祉学部

2) Yu NAKAMURA

兵庫県立清水が丘学園

3) Tsurue MANDAI

神戸大学附属病院小児科

4) Mamoru SHIOMI

兵庫県立清水が丘学園

## 2 アンケート調査実施時期, 児童状況, 調査項目等

### (1) アンケート調査実施時期

アンケート調査は近畿情緒障害児短期治療施設協議会の協力のもと, 平成18年11月上旬~12月上旬に近畿圏の情短9施設にアンケートを配布し, 9施設より回答が得られた。また, 児童養護施設は兵庫県児童養護施設連絡協議会の協力のもと, 平成20年11月上旬~11月下旬に兵庫県下の15施設にアンケートを配布し, 13施設から回答が得られた。アンケートは, 上記の期間に各施設の直接処遇職員が回答した。

### (2) 児童状況

情短施設は平成18年10月1日付けの入所児童312名を対象とした。

児童養護施設は平成20年10月1日付けの入所児童778名の内, 有効回答とみなされた753名を対象とした。

アンケート調査における児童年齢は情短施設において平成18年10月1日付け, 児童養護施設は平成20年10月1日付けでの学年である。学年区分は「未就学児童」, 小学1~3年生の「小学生低学年」, 小学4~6年生の「小学生高学年」, 「中学生」, 「高校生」の5区分とした。なお, 情短施設では「未就学児童」が0名のため, 両群の年齢幅を一致させるように未就学児を除外して分析した。(表1参照)

表1 児童の状況

年齢区分	児童養護施設	情短施設
N	753	312
男児:女児	386 (51.3%):367 (48.7%)	181 (58.0%):131 (42.0%)
未就学	170 (22.6%)	0 (0.0%)
小学生低学年	147 (19.5%)	55 (17.6%)
小学生高学年	157 (20.8%)	103 (33.0%)
中学生	167 (22.2%)	103 (33.0%)
高校生	112 (14.9%)	51 (16.3%)

### (3) アンケート調査内容

被虐待児童の種別に関する質問項目は「虐待なし」, 「身体的虐待のみ」, 「心理的虐待のみ」, 「性的虐待のみ」, 「ネグレクトのみ」, 虐待の種別は問わないが2種類の虐待が重複している「2種虐待重複」, 虐待の種別は問わないが3種の虐待が重複している「3種虐待重複」, 虐待の種別は問わないが4種の虐待が重複している「4種虐待重複」の7区分とした。虐待の種別に関しては, 児童相談所からの情報や施設で把握した情報をもとに, 施

設職員が判断したものである。

問題行動に関しては, 施設入所後に見られるアンケート実施期間中に見られる行動についての回答である。質問項目は内化行動(「引きこもりや抑うつ」(以下, 「引きこもり」), 「自発性の欠如を示し不活発」(以下, 「不活発」と略す), 「不平や不満の訴えが過剰」(以下, 「不平・不満」と略す), 「原因が特定できない恐怖症」(以下, 「恐怖症」と略す), 「非常に過敏であり, 不安が強い」(以下, 「不安」と略す), 「睡眠障害や夜驚, 夜尿・遺尿」(以下, 「睡眠」と略す), 「退行」, 「身体的な不調の訴えが多い」(以下, 「身体的不調」と略す), 「自傷行為」, 「摂食障害」, 「自殺のほのめかし」, 「解離」, 「強迫行為」, 「その他」))と外化行動(「他者を攻撃(叩く, 蹴るなど)」(以下, 「攻撃」と略す), 「衝動性のコントロールが弱い(器物破損等破壊性が高い)」(以下, 「衝動性」と略す), 「他者に対して挑発的(その結果, 虐待やいじめを招く)」(以下, 「挑発的」と略す), 「こびる(他者に物をあげて関係を取ることも多い)」(以下, 「こびる」と略す), 「他者を操作する(いじめを陰で操るなど)」(以下, 「操作」と略す), 「無断外出, 放浪, 徘徊(夜間時の棟内徘徊を含む)」(以下, 「無断外出」と略す), 「他者の物の取り込み」(以下, 「取り込み」と略す), 「火遊び, 放火」(以下, 「火遊び」と略す), 「性的行動(性についての異常な関心や行動)」(以下, 「性的行動」と略す), 「その他」とした。

## III 児童養護施設と情短施設における虐待の有無と児童の問題行動の特徴

### 1 統計的の手法

統計的な分析にはSTARを使用して $\chi^2$ 二乗検定を行い, 両群の各項目の出現率を比較検討した。危険率の標記は以下の通りである。

危険率の標記	
P < .05	*
P < .01	**
NS	: 有意差が認められない場合

### 2 調査結果

本論文では, 有意差が認められたものに焦点を当てて結果を示すこととする。

#### (1) 被虐待児童の状況

「身体的虐待」と「3種虐待重複」は情短施設での割合が有意に高い結果となった。(表2参照)

#### (2) 虐待なし 内化行動

虐待なし群における内化行動は「引きこもり」, 「不安」,

表2 被虐待児童の状況

虐待種別	児童養護	情短施設	p
虐待なし	256 (43.9%)	89 (28.5%)	NS
身体的虐待のみ	35 (6.0%)	56 (17.9%)	*
心理的虐待のみ	10 (1.7%)	9 (2.9%)	NS
性的虐待のみ	2 (0.3%)	3 (1.0%)	NS
ネグレクトのみ	149 (25.6%)	45 (14.4%)	NS
2種虐待重複	102 (17.5%)	61 (19.6%)	NS
3種虐待重複	24 (4.1%)	46 (14.7%)	*
4種虐待重複	5 (0.9%)	3 (1.0%)	NS

表3 虐待なし 内化行動

内化行動	児童養護	情短	p
引きこもり	5.3%	20.2%	**
不活発	11.3%	20.2%	NS
不平・不満	19.4%	29.2%	NS
恐怖症	2.8%	4.5%	NS
不安	6.1%	28.1%	**
睡眠	8.1%	11.2%	NS
退行	3.2%	13.5%	*
身体的不調	9.7%	25.8%	**
自傷行為	1.6%	5.6%	NS
摂食障害	0.8%	1.1%	NS
自殺のほめかし	2.4%	0.0%	NS
解離	0.4%	1.1%	NS
強迫行為	1.6%	11.2%	*
その他	4.5%	6.7%	NS

「退行」, 「身体的不調」, 「強迫行為」の5項目において情短施設が児童養護施設より有意に多かった。それ以外の9項目において有意差はなかった。(表3 参照)

### (3) 虐待なし 外化行動

虐待なしにおける外化行動は「攻撃」, 「衝動性」, 「挑発的」, 「火遊び」, 「性的行動」の5項目において情短施設が児童養護施設より有意に多かった。しかし、「取り込み」の項目は児童養護施設が情短施設より有意に多かった。それ以外の4項目において有意差はなかった。(表4 参照)

### (4) 身体的虐待のみ 内化行動

身体的虐待のみにおける内化行動は「睡眠」, 「退行」, 「自傷行為」, 「強迫行為」の4項目において情短施設が児童養護施設より有意に多かった。それ以外の10項目において有意差はなかった。(表5 参照)

表4 虐待なし 外化行動

外化行動	児童養護	情短	p
攻撃	14.2%	41.6%	**
衝動性	14.6%	51.7%	**
挑発的	17.0%	38.2%	**
こびる	10.9%	20.2%	NS
操作	9.7%	7.9%	NS
無断外出	3.2%	7.9%	NS
取り込み	7.3%	0.0%	**
火遊び	0.8%	6.7%	**
性的行動	5.7%	15.7%	*
その他	5.7%	0.0%	NS

表5 身体虐待のみ 内化行動

内化行動	児童養護	情短	p
引きこもり	8.6%	10.7%	NS
不活発	2.9%	8.9%	NS
不平・不満	31.4%	33.9%	NS
恐怖症	2.9%	3.6%	NS
不安	25.7%	23.2%	NS
睡眠	2.9%	14.3%	**
退行	5.7%	21.4%	**
身体的不調	28.6%	23.2%	NS
自傷行為	0.0%	7.1%	**
摂食障害	2.9%	3.6%	NS
自殺のほめかし	0.0%	3.6%	NS
解離	0.0%	3.6%	NS
強迫行為	0.0%	7.1%	**
その他	8.6%	3.6%	NS

### (5) 身体的虐待のみ 外化行動

身体的虐待のみにおける外化行動は「攻撃」, 「衝動性」, 「挑発的」, 「無断外出」, 「火遊び」の5項目において情短施設が児童養護施設より有意に多かった。しかし、「取り込み」, 「その他」の2項目において児童養護施設が情短施設より有意に多かった。それ以外の3項目において有意差はなかった。(表6 参照)

### (6) ネグレクトのみ 内化行動

ネグレクトのみにおける内化行動は「引きこもり」, 「不平・不満」, 「不安」, 「強迫行為」, 「その他」の5項目において情短施設が児童養護施設より有意に多かった。しかし、「恐怖症」の項目においては児童養護施設が情短施設より有意に多かった。それ以外の8項目において有意差はなかった。(表7 参照)

### (7) ネグレクトのみ 外化行動

表6 身体虐待のみ 外化行動

外化行動	児童養護	情短	p
攻撃	17.1%	66.1%	**
衝動性	17.1%	69.6%	**
挑発的	31.4%	73.2%	**
こびる	14.3%	25.0%	NS
操作	5.7%	5.4%	NS
無断外出	0.0%	12.5%	**
取り込み	17.1%	0.0%	**
火遊び	2.9%	10.7%	*
性的行動	8.6%	8.9%	NS
その他	11.4%	0.0%	**

表8 ネグレクトのみ 外化行動

外化行動	児童養護	情短	p
攻撃	12.1%	37.8%	**
衝動性	12.8%	55.6%	**
挑発的	10.1%	40.0%	**
こびる	6.0%	28.9%	**
操作	6.0%	8.9%	NS
無断外出	5.4%	6.7%	NS
取り込み	6.0%	0.0%	**
火遊び	0.7%	0.0%	**
性的行動	3.4%	11.1%	*
その他	10.1%	0.0%	*

表7 ネグレクトのみ 内化行動

内化行動	児童養護	情短	p
引きこもり	7.4%	24.4%	**
不活発	16.1%	22.2%	NS
不平・不満	18.8%	51.1%	**
恐怖症	9.4%	2.2%	*
不安	7.4%	26.7%	**
睡眠	12.1%	17.8%	NS
退行	8.7%	15.6%	NS
身体的不調	4.7%	13.3%	NS
自傷行為	2.0%	4.4%	NS
摂食障害	0.7%	2.2%	NS
自殺のほのめかし	3.4%	0.0%	NS
解離	2.0%	2.2%	NS
強迫行為	0.0%	6.7%	**
その他	0.0%	6.7%	**

表9 2種虐待重複 内化行動

内化行動	児童養護	情短	p
引きこもり	8.8%	8.2%	NS
不活発	11.8%	21.3%	NS
不平・不満	27.5%	44.3%	NS
恐怖症	3.9%	1.6%	NS
不安	17.6%	31.1%	NS
睡眠	12.7%	13.1%	NS
退行	5.9%	19.7%	**
身体的不調	7.8%	34.4%	**
自傷行為	2.9%	6.6%	NS
摂食障害	1.0%	1.6%	NS
自殺のほのめかし	4.9%	0.0%	*
解離	2.9%	3.3%	NS
強迫行為	2.0%	3.3%	NS
その他	5.9%	13.1%	NS

ネグレクトのみにおける外化行動は「攻撃」、「衝動性」、「挑発的」、「こびる」、「性的行動」の5項目において情短施設が児童養護施設より有意に多かった。しかし、「取り込み」、「火遊び」、「その他」の3項目においては児童養護施設が情短施設より有意に多かった。それ以外の2項目において有意差はなかった。(表8参照)

(8) 2種虐待重複 内化行動

2種虐待重複における内化行動は「退行」、「身体的不調」の2項目において情短施設が児童養護施設より有意に多かった。しかし、「自殺のほのめかし」の項目においては児童養護施設が情短施設より有意に多かった。それ以外の11項目において有意差はなかった。

(9) 2種虐待重複 外化行動

2種虐待重複における外化行動は「攻撃」、「衝動性」、

「挑発的」、「こびる」、「火遊び」の5項目において情短施設が児童養護施設より有意に多かった。しかし、「操作」、「その他」の2項目においては児童養護施設が情短施設より有意に多かった。それ以外の3項目において有意差はなかった。(表10参照)

(10) 3種虐待重複 内化行動

3種虐待重複における内化行動は「睡眠」、「退行」、「自傷行為」、「その他」の4項目において情短施設が児童養護施設より有意に多かった。しかし、「解離」、「強迫行為」の2項目においては児童養護施設が情短施設より有意に多かった。それ以外の8項目において有意差はなかった。(表11参照)

(11) 3種虐待重複 外化行動

3種虐待重複における外化行動は「衝動性」、「こびる」、

表10 2種虐待重複 外化行動

外化行動	児童養護	情短	p
攻撃	8.6%	60.9%	**
衝動性	22.5%	47.5%	**
挑発的	22.5%	60.7%	**
こびる	7.8%	23.0%	*
操作	13.7%	4.9%	*
無断外出	3.9%	9.8%	NS
取り込み	6.9%	1.6%	NS
火遊び	0.0%	14.8%	**
性的行動	6.9%	8.2%	NS
その他	9.8%	0.0%	**

表11 3種虐待重複 内化行動

内化行動	児童養護	情短	p
引きこもり	8.3%	4.3%	NS
不活発	12.5%	19.6%	NS
不平・不満	37.5%	34.8%	NS
恐怖症	8.3%	2.2%	NS
不安	25.0%	32.6%	NS
睡眠	0.0%	15.2%	**
退行	4.2%	15.2%	*
身体的不調	16.7%	15.2%	NS
自傷行為	0.0%	4.3%	*
摂食障害	0.0%	0.0%	NS
自殺のほめかし	0.0%	0.0%	NS
解離	12.5%	0.0%	**
強迫行為	12.5%	2.2%	**
その他	0.0%	4.3%	*

表12 3種虐待重複 外化行動

外化行動	児童養護	情短	p
攻撃	25.0%	32.6%	NS
衝動性	16.7%	47.8%	**
挑発的	37.5%	56.5%	NS
こびる	4.2%	13.0%	**
操作	12.5%	13.0%	NS
無断外出	8.3%	10.9%	NS
取り込み	4.2%	2.2%	NS
火遊び	0.0%	4.3%	*
性的行動	0.0%	6.5%	NS
その他	0.0%	0.0%	NS

「火遊び」の3項目において情短施設が児童養護施設より有意に多かった。その以外の7項目において有意差はなかった。(表12参照)

### 3 児童養護施設と情短施設における虐待の有無と児童の問題行動に関する考察

#### (1) 被虐待児童の状況

被虐待児童の状況では、「身体的虐待」と「3種虐待重複」は情短施設での割合が有意に高い結果となった。身体的虐待のみ群に見られる問題行動に「攻撃」、「衝動性」、「挑発」などの頻度が高く見られることなどから、虐待の影響からくる深刻な問題を示す児童や重篤な被虐待児童のケアが情短施設に求められているといえる。

また、虐待なし群とネグレクトのみ群は児童養護施設に多くみられた。このことから、児童養護施設においては基本的な養育とケアは重要な役割といえる。ネグレクト環境で育った児童は、基本的な社会習慣や生活習慣が十分に身につけていないことが多く、そのために不適応が起こる場合があるので、身辺自立や基本的な生活習慣や対人関係の取り方などについての丁寧なケアが求められる。

#### (2) 虐待なし 内化行動

虐待なし群における内化行動は「引きこもり」、「不安」、「退行」、「身体的不調」、「強迫行為」の5項目において情短施設が児童養護施設より有意に多かった。この結果から、虐待を受けていない児童でも、情短施設のほうが児童養護施設よりも多くの内化された問題行動を示すといえる。

#### (3) 虐待なし 外化行動

虐待なしにおける外化行動は「攻撃」、「衝動性」、「挑発的」、「火遊び」、「性的行動」の5項目において情短施設が児童養護施設より有意に多かった。しかし、「取り込み」の項目は児童養護施設が情短施設より有意に多かった。この結果から、虐待を受けていない児童でも、情短施設のほうが児童養護施設よりも多くの外化された問題行動を示すといえる。また、外化された問題行動においても「攻撃」、「衝動性」、「挑発的」、「火遊び」、「性的問題」など対人関係や集団適応において大きい問題となる項目が有意に多いという結果になり、情短施設では、児童の生活の安全などが、より重要な課題と言える。また、児童養護施設では「取り込み」の項目が有意に多くなっていた。物の取り込みの問題は、居室の設定や児童の物の管理についてなど施設における生活の枠組みやルール設定などの問題でもあり、児童養護施設におけるが

基本的な生活の枠組みが課題と言える。

(4) 身体的虐待のみ 内化行動

身体的虐待のみにおける内化行動は「睡眠」,「退行」,「自傷行為」,「強迫行為」の4項目において情短施設が児童養護施設より有意に多かった。この結果から、身体的虐待のみの内化行動では、情短施設のほうが多い傾向となっているといえる。それらは多岐にわたり、精神症状や行動面など様々な形で現れると言える。

(5) 身体的虐待のみ 外化行動

身体的虐待のみにおける外化行動は「攻撃」,「衝動性」,「挑発的」,「火遊び」の5項目において情短施設が児童養護施設より有意に高かった。この結果から、身体的虐待のみの外化行動は情短施設のほうが多い傾向と言える。特に「攻撃性」,「衝動性」,「火遊び」など暴力などの重大な問題を抱えている児童が情短施設には入所しており、情短施設ではより専門的な支援が必要とされているといえる。

(6) ネグレクトのみ 内化行動

ネグレクトのみにおける内化行動は「引きこもり」,「不平・不満」,「不安」,「強迫行為」,「その他」の5項目において情短施設が児童養護施設より有意に多かった。しかし、「恐怖症」の項目においては児童養護施設が情短施設より有意に多かった。この結果から、ネグレクトのみにおける内化行動においては、情短施設のほうが問題を示す児童が多いといえる。特に、「不平・不満」,「不安」などの問題を示す児童が多く、ネグレクトを受けた結果として情緒的な問題を示しているといえる。しかし、「恐怖症」の項目では児童養護施設が多い傾向となり、児童養護施設においてもネグレクトを受けた児童は情緒的な問題を示すといえる。

(7) ネグレクトのみ 外化行動

ネグレクトのみにおける外化行動は「攻撃」,「衝動性」,「挑発的」,「こびる」,「性的行動」の5項目において情短施設が児童養護施設より有意に多かった。しかし、「取り込み」,「火遊び」,「その他」の3項目においては児童養護施設が情短施設より有意に多かった。これらの結果から、ネグレクトのみの外化行動においては情短施設のほうが多い傾向と言える。特に「攻撃性」,「衝動性」,「火遊び」など暴力などの重大な問題を抱えている児童が、身体的虐待のみと同様、情短施設には入所しており、情短施設ではより専門的な支援が必要とされているといえる。しかし、「取り込み」,「火遊び」,「その他」の項目では児童養護施設に多い傾向が見られ、児童養護施設においても生活の

枠組みや施設の安全が重要な問題といえる。

(8) 2種虐待重複 内化行動

2種虐待重複における内化行動は「退行」,「身体的不調」の2項目において情短施設が児童養護施設より有意に多かった。しかし、「自殺のほのめかし」の項目においては児童養護施設が情短施設より有意に多かった。この結果から、2種虐待重複における内化行動は「退行」,「身体的不調」の2項目において情短施設のほうが多いといえる。虐待の種別が増えても児童が示す内化行動は、情短施設のほうが多いといえる。しかし、「自殺のほのめかし」の項目では、児童養護施設が多い傾向といえ、児童養護施設においても虐待種別が増えた児童の心理的ケアが必要といえる。

(9) 2種虐待重複 外化行動

2種虐待重複における外化行動は「攻撃」,「衝動性」,「挑発的」,「こびる」,「火遊び」の5項目において情短施設が児童養護施設より有意に多かった。しかし、「操作」,「その他」の2項目においては児童養護施設が情短施設より有意に多かった。この結果から、2種虐待重複における外化行動は情短施設のほうが多い傾向といえ、虐待種別が増えても、暴力などの重大な問題を抱えている児童が情短施設に多いと言える。しかし、「操作」の項目においては児童養護施設が多い傾向となり、児童の人間関係に関する問題が児童養護施設にも見られ、それらについてのケアが児童養護施設でも求められているといえる。

(10) 3種虐待重複 内化行動

3種虐待重複における内化行動は「睡眠」,「退行」,「自傷行為」,「その他」の4項目において情短施設が児童養護施設より有意に多かった。しかし、「解離」,「強迫行為」の2項目においては児童養護施設が情短施設より有意に多かった。この結果から、3種虐待重複における内化行動は情短施設のほうが多い傾向といえる。しかし、「解離」,「強迫行為」の2項目においては児童養護施設が情短施設より有意に多い傾向となり、重篤な虐待を受けた児童が示す問題のケアが児童養護施設に求められているといえる。

(11) 3種虐待重複 外化行動

3種虐待重複における外化行動は「衝動性」,「こびる」,「火遊び」の3項目において情短施設が児童養護施設より有意に多かった。この結果から、3種虐待重複における外化行動は情短施設のほうが多い傾向にあり、重篤な虐待を受けた児童が示す暴力の問題について、情短施設

における専門的支援の必要性があるといえる。

#### IV まとめ

児童養護施設と情短施設における児童の虐待の有無と問題行動についての比較研究を行い、虐待種別、虐待が単一か重複かによっての特徴が見られた。また、児童養護施設と情短施設それぞれに問題行動の傾向が見られ、それぞれの施設種別ごとに支援の要点が明らかになった。総括的に以下のことが考えられる。

##### (1) 被虐待児童の状況について

身体虐待のみ群、3種虐待重複群が情短施設において有意に多いという結果になった。かなり重篤な被虐待児童の生活ケアや虐待によるトラウマ治療等が情短施設に求められているといえる。一方で、虐待なし群とネグレクトのみ群は児童養護施設に多いという結果になり、不適切な家庭環境（ネグレクト）に育った児童の再養育支援が児童養護施設の重要な役割といえる。

##### (2) 虐待種別と問題行動について

虐待種別ごとに見ても、外化された問題行動は情短施設に有意に高い項目が多い。しかし、内化された問題行動は、児童養護施設と情短施設に有意差がない、或いは児童養護が有意に高い項目もある。これらのことから、情短においては外化された問題行動への対応、具体的には安全・安心を図るための生活上の枠組みの検討や暴力防止を図るための各種専門的支援策の導入が必要であると考えられる。また、児童養護においては内化された問題行動への対応が求められているので、更なる心理ケアの導入や医療との連携強化を図るなどの対策が求められる。

#### V おわりに

本研究では、児童養護施設と情短施設における比較研究を行ない、それぞれの施設に求められている役割についての考察を行った。

虐待を受けた児童の児童福祉施設への入所が増え続ける中、児童養護施設と情短施設においてはよりよいケアが求められている。今後は施設の特徴を生かし、子どもの特性にあったケアを行っていく必要がある。児童は情緒面や行動面、対人関係についてなど多様な問題を示すので、児童福祉施設の支援者はきめ細やかな生活ケア、アセスメントに基づいた個別心理治療、児童の健全な成長を促すグループアプローチなど様々なスキルを用い支援していく必要がある。また、児童相談所や学校、医療機関等との有機的な協働体制も欠くことはできない。

今後は、本研究をふまえ、虐待種別間による問題行動の違いについて、虐待重複の内容についてなどの詳しい分析が必要である。

最後に、この調査研究に関してご協力いただいた児童養護施設及び情短施設の職員の方々に紙面を借りてお礼申し上げたい。

#### 参考文献

- 1) 伊東ゆたか他 (2003) : 「児童養護施設で生活する被虐待児に関する研究 (1)」子どもの虐待とネグレクト 第5巻 第2号 pp352-366
- 2) 伊東ゆたか他 (2003) : 「児童養護施設で生活する被虐待児に関する研究 (2)」子どもの虐待とネグレクト 第5巻 第2号 pp367-379
- 3) Judith Lewis Herman (1992) : 「TRUMA AND RECOVERY」Harper Collins Publishers (中井久夫訳 (1999) : 「心的外傷と回復」 みすず書房)
- 4) 中村有生 (2009) : 「清水が丘学園における小集団活動グループでの治療的アプローチの試み - 集団形成が困難な被虐待児間の交流への介入方法について -」心理治療と治療教育 - 全国情緒障害児短期治療施設研究紀要 第21号 pp108-118
- 5) 八木修司他 (2008) : 「被虐待児童の生活支援と心理ケアについて - 近畿圏における情緒障害児短期治療の取り組みを中心に -」心理治療と治療教育 - 全国情緒障害児短期治療施設研究紀要 第19号 pp23-32
- 6) 八木修司他 (2009) : 「情緒障害児短期治療施設に入所する被虐待児童の行動特徴について」関西福祉大学社会福祉学部研究紀要 第12号 pp267-275
- 7) 全国情緒障害児短期治療施設協議会 (2009) : 「平成19年度全国情緒障害児短期治療施設における児童の臨床統計」心理治療と治療教育 - 情緒障害児短期治療施設研究紀要 - 第20号 pp127-130

